コスモ石油
エコカード基金

ずっと地球で暮らそう。

2004

2003年度コスモ・ザ・カード「エコ」活動報告書

第2期：2003年4月1日～2004年3月31日

ごあいさつ

コスモ石油エコカード基金はスタートから3年目を迎え、約75,000名の会員の皆様よりご支持頂けるまでに成長しました。皆様方にはここに厚く御礼申し上げるとともに一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

本基金活動「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトでは、地球温暖化防止をメインテーマとして温暖化の影響を真っ先に受ける発展途上国への支援、そして日本では次世代に向けた取り組みとして環境教育への支援を展開しております。これらプロジェクトは持続可能な社会の実現に向けた活動であり、「ずっと地球で暮らそう。」というフレーズの実現に向けて会員の皆様、地域社会、NPOやNGOの方々と一緒に取組んでいます。私は、この連携がとても大切であると思っており、プロジェクトサイトを訪れる度に強く実感致します。

私は、2004年2月に熱帯雨林保全プロジェクトサイトの一つであるソロモン諸島マライタ州フィユ村を定地型有機農業普及の核となるパーマカルチャーセンター（詳細は後述）の開所式に出席するために訪れました。このセンター建設に際して村の人たちは自分たちの仕事のあと集まり、重機も使わずスコップで3haに及ぶ土地を切り拓いていったそうです。その苦労の大きさは言うまでもありませんが、村の人たちが一丸となってセンターを作り上げたことも非常に重要な意味を持っていると思います。

今後、プロジェクトが何らかの苦難に直面したとしても村全体で作り上げた経験からその苦難を皆で切り抜けることができるだろうと思い、人の力の大きさを実感しました。

このプロジェクトを始め「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトを進めていく中では、会員の皆様を始め、地域社会、NPOやNGO、政府の方々など人と人の連携を強めるよう努め、かつ環境問題だけでなくそれに繋がる人口問題や食糧問題そして貧困などにも焦点を当てながら持続可能な社会の早期実現に向けて地道に取組んでいきたいと思いますので、引き続き、ご理解ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

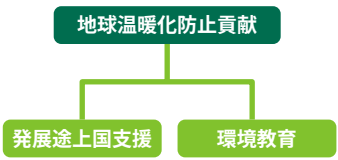
コスモ石油エコカード基金
理事長 森川 桂造

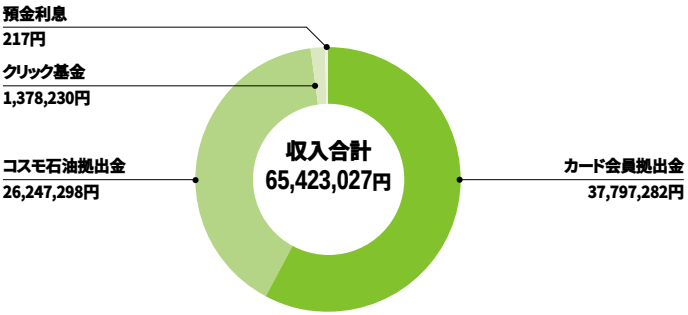
コスモ石油エコカード基金とは？

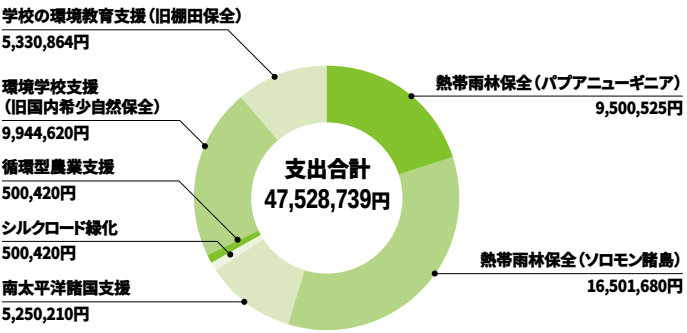
入会時と次年度以降に毎年、お客様からお預かりした寄付金500円と、コスモ石油からの寄付金をもとに運営されています。コスモ石油からは、コスモ・ザ・カード「エコ」の売上0.1%と、コスモ・ザ・カードの売上0.01%が拠出されています。会員数は、2004年3月末で75,118人になりました。

どのような活動に取り組んでいるのですか？

「ずっと地球で暮らそう。」を合い言葉に、地球規模での環境問題と言われている温暖化を中心に、その温暖化防止の貢献方法として発展途上国への支援や環境教育支援をしています。現地で活動するNPOやNGOのパートナーとともに取組内容を考え、私たちスタッフが現地に足を運び、地域社会の人たちと直接何度も議論し、エコカードプロジェクトをつくり上げています。







活動概要

熱帯雨林保全プロジェクト

［パプアニューギニア/ソロモン諸島］

二酸化炭素の大きな吸収源である熱帯雨林を保全するため、その第一歩として森林への負担をかけない定地での循環型有機農業の普及を支援しています。

南太平洋諸国支援プロジェクト

［キリバス共和国］

温暖化が原因と言われる海面上昇で、井戸水の海水化や海岸線の浸食などの被害に直面する島嶼国を支援しています。

シルクロード緑化プロジェクト

［中国］

地域住民や地元政府とともに、砂漠化の進行の防止を目指してシルクロードへの植林を推進しています。

循環型農業支援プロジェクト

［フィリピン］

キャッサバの葉を再利用する循環型農業を軸とした地域の持続的発展を支援しています。

学校の環境教育支援プロジェクト

［日本国内］

学校の「総合的な学習の時間」に環境教育プログラムを提供するなど、学校での環境教育を支援しています。

環境学校支援プロジェクト

［日本国内］

自然環境と社会環境を同時に体験、勉強することを通して、環境に対し自ら行動できる子どもたちの育成を支援しています。

豊かな実りを願って…

熱帯雨林保全プロジェクト

私たちは南太平洋諸国パプアニューギニア、ソロモン諸島の貴重な熱帯雨林を保全するために定地での有機農業普及への支援を続けています。

パプアニューギニアやソロモン諸島では、焼畑農業に代表される移動耕作が広く展開されており、出生率の高止まりと死亡率の低下による人口の急増や食生活の変化に伴い、食糧生産のため開墾地面積が増加し、森林にとって大きな負担となっています。

また、この人口圧は雇用問題も深刻化させ、農村部から都市部への人口の流れが治安の悪化を招いており、農村部での取組みはとても重要です。

そこで私たちは、農村部で森林保全、食糧生産そして雇用確保が実現できる定地での循環型有機農業の普及に向けて支援を始めています。

パプアニューギニアの焼畑

パプアニューギニア　クランプン村の精米小屋（左、02年度寄贈）とぼかし小屋（右、03年度寄贈）

パプアニューギニアでの活動

精米機に興味を示す
パルマルマルの子どもたち（03年度寄贈）

パプアニューギニアは、オーストラリアの北東、赤道より少し南に位置する熱帯の国です。人口の86%が農村人口で、農業による農村開発は国の課題にもなっており、定地での稲作の普及が諸問題の解決の一助になることが期待されています。

私たちは、稲作普及の障害となっている精米施設不足を解消するために、プロジェクトの第1ステップとして精米機や精米小屋設置を支援してきました。これまでの4つのコミュニティーに加え、今年はパルマルマル村へ同様の支援を実施し、既に精米機が設置済みの2つの村（クランプン村、ウボル村）へは循環型有機農業の実現に向けた次のステップとして、有機肥料を作るための製造小屋の建設を支援しました。

プロジェクトでの苦労と喜び

現地からの報告では、建設や設置にあたって定期貨物船がないことで資機材の搬送に時間が掛かかるなど問題もあったようです。一方でプロジェクトパートナーである（財）オイスカの方々を中心に現地の子どもたちからお年寄まで総出で建設にあたり、完成させたという良いニュースもあり、この村全体が一丸で努力、取組んだことは今後大きな成果に結びつくと思います。また、クランプン村やウボル村ではすでに森林の伐採による食糧生産は行われておらず、定地での耕作は現地に根付きつつあります。

私たちは、今後もオイスカエコテックセンターでの農業研修の充実をはじめ村々へ一連の支援を継続、強化していきたいと思っています。

精米される前の米

精米された米

パーマカルチャーセンターで作業する現地の人々

ソロモン諸島での活動

ソロモン諸島は、パプアニューギニアの東隣に位置し、肥沃な土壌、豊富な雨量に恵まれた農業国です。
私たちのプロジェクトは、マライタ州フィユ村というごく平均的な村に循環型有機農業のモデルビレッジを作り上げ、そこの施設での農業研修によって人材を育成することやその土地に合った循環型農業の確立と普及を目指しています。

今年の活動と今後

2003年度は、プロジェクトパートナーのNPO法人APSDをメインに、モデルビレッジ実現の中心となるパーマカルチャーセンター施設が一部完成しました。
それらは養豚施設、有機物肥料製造小屋（ボカシ小屋）、炭焼き小屋などです。焼畑農業から定地型有機農業に移行するに伴い、土壌への必要最低限の養分補給が重要であり、豚の糞尿などから堆肥を作るのです。村の方々からは有機肥料を施した方が作物の生育が旺盛で、味も良いというような反応もあり、循環の流れが進みつつあります。
今後も引き続きこのセンターの施設を充実させていくほか、フィユ村から周辺の村に波及していくように人材の育成への支援に力を入れていきます。

開墾を進めている

パーマカルチャーセンター開所式の模様

開所式に参加した理事長（写真右）

CO_2フリーガソリン

CO2を森に返そう…温暖化防止に向けて

コスモ石油では、オーストラリア南西部で5,100ha（山手線の内側の広さ）のユーカリの森の育成を支援しています。去年に引き続き、コスモ石油はこの森が1年間に吸収したCO2、47,489トン分を排出権として取得しました。そして、このうち16,288トンを、会員の皆様が2003年12月に給油されたガソリン（6,163kl）と軽油（754kl）から排出されたCO2（計16,228トン）に充当しました。これは、ガソリンと軽油から排出されたCO2、16,228トンが、この森に吸収されたことを意味します。
石油を使うことは即ちCO2を排出することですが、石油を使わない生活は今の私たちには困難です。CO2フリーガソリンを通して、皆様と温暖化防止に向けてできることの可能性を考えていきたいと思います。
※当社が取得した排出権はノルウェーの森林管理会社ヤコプリ社と、あずさ監査法人の検証を受けています。

	03年12月ガソリン給油量	6,163kl	×	排出係数2.31t／kl	＝	14,237t
＋	03年12月軽油給油量	754kl	×	排出係数2.64t／kl	＝	1,991t
	合計					約16,228t

クリック募金

コスモ石油のホームページを訪れた方が、支援したい環境保全プロジェクトを選んでクリックすると、自動的に、ご本人に代わってコスモ石油がそのプロジェクトに1円を寄付したことになる「クリック募金」を2003年2月に開始しました。開始から2004年3月末までに、3,039,824回のクリックがありました。

※1日1クリックまで

http://www.cosmo-oil.co.jp/kankyo/charity/index.html

郵　便　は　が　き

切　手

写真：精米機の寄贈式にて（パプアニューギニア ウボル村）

電話会社のアンテナから撮った島の様子

南太平洋諸国支援プロジェクト

海面上昇は、珊瑚礁でできた海抜の低い島々に様々な被害をもたらしています。

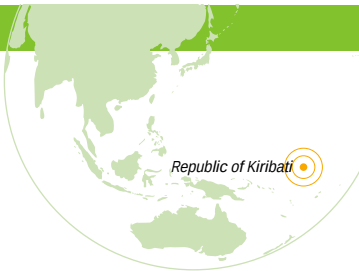
赤道直下の島で照りつける太陽からはクリスマスという名前は想像つきませんが、プロジェクトの舞台クリスマス島は、南太平洋に東西3,000kmに点在するキリバス共和国の島のひとつで、クリスマスイブに発見されたことからその名が付けられたと言われています。

このクリスマス島は珊瑚礁でできた島であり、内陸は至るところにラグーンがあり、当然山や川はありません。この島の人たちは、古くからレンズウォーターと呼ばれる井戸水を生活に使っています。温暖化の影響と言われる海面上昇によって、この井戸水に海水が混じり、飲料水として使えない状況になっており、島の人たちの生活に大きな影響を及ぼしています。

一方、この島の気候は年間を通して乾燥していましたが、気候変動の影響により降水量が急増しているということも分かりました。雨量の増加により、政府、島民ともに期待を込めて推進している塩田による天然塩の生産に、塩がなかなか乾かないなどの問題が起こり始めています。

クリスマス島

井戸水をくむ子どもたち



2003年度の活動と2004年度の計画

そこで、私たちは飲料水については降水を利用することを決め、2003年度は同島タバケア村に雨水貯蔵タンクを、天然塩の生産に対しては雨を防ぐ手立てはないかということを関係者と協議、検討を重ねた結果、天然塩生産のために動かすことのできるポリトレーと海水を運ぶポンプを一式寄贈しました。

2004年度の計画では、海面上昇による海岸侵食の被害の大きいタラワ島の海岸線にマングローブを現地の方々と一緒に植林する計画です。

雨水貯蔵タンクの設置も完了

ポリトレーでの天然塩の生産

貴重な水を飲む少年

黄土高原で植林をする現地の人たち

シルクロード緑化プロジェクト

中国内陸部の黄土高原で、沙棘（サージ）の植林活動を支援しています。

13億人という世界最大の人口を抱える中国の経済成長が、ここ数年、国際的に注目を集めています。一方で、内陸部と沿岸部の経済格差や、急速な経済成長に伴う環境悪化などの問題も深刻化しています。中国では経済的に立ち遅れている内陸部の開発と環境保全の両立を目指して、「西部大開発」政策や「山川秀美」政策が進められていますが、もともと乾燥地帯の広がるこの地域（シルクロード一帯）では、地球規模での気候変動や過度の取水などによる地下水の水位低下などで砂漠化が進行し、農作物の不作を招くなど、食糧不足や貧困などの問題にも直面しています。シルクロード上に位置する黄土高原約2,000kmでの植林活動を支援しています。

2003年度の活動と2004年度の計画

私たちはパートナーのNPO法人2050とともに、黄土高原の砂漠化防止と、周辺住民の生活の安定に向けて何ができるかを、地元の方々や地域人民政府の方々と討論会や勉強会を開くなどして何度も検討し、タクラマカン砂漠を発祥の地とする「沙棘（サージ）」の植林活動を進めるところにこぎつけました。沙棘は保水力が強く、砂漠化の進行を防止する効果があります。
また、その実は市場で売ることができ、現金収入が期待できます。2003年度は黄土高原にある陝西省の2ヶ所で、現地の方々や小学生約50名とともに、合計約28haの乾燥地に約15,700本の沙棘を植えました。
2004年度も引き続き、陝西省で植林を行います。

植林に参加した農家の人たちや、小学生、NPOスタッフ

沙棘（サージ）を植える現地の子どもたちとNPOスタッフ

キャッサバ畑

織機の技術を学んでいます

パラワンの農家

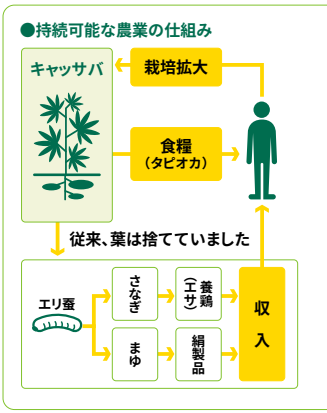
循環型農業支援プロジェクト

フィリピンのパラワン島で、キャッサバの葉を再利用した循環型農業を支援しています。

フィリピンは7,109の島々から成り立っています。私たちはその島の一つ、マレーシア北部に近い細長い島、パラワン島の首府プエルト・プリンセサ市で、パートナーNPO法人2050とともに、今まで使われていなかったキャッサバの葉を有効利用した循環型農業の定着を目指して取り組んでいます。

循環型農業のキーとなる「キャッサバの葉」

キャッサバの根は「タピオカ」として私たちにも馴染み深いものです。地元でも従来から食糧として消費されていましたが、葉は捨てられていました。この葉をエサとするエリ蚕を養蚕し、その排泄物は全て堆肥として再利用。さなぎは現地の人たちの食用や家畜の飼料となり、繭は絹織物などの工業品として販売することで収入をもたらし、次の養蚕につなげて行く－このような循環が定着することにより、自然を生かした地域の持続的な発展が実現することを私たちは期待しています。



2003年度の活動と2004年度の計画

2003年度は繭を加工するプロセスを支援するため、糸紡ぎ機や織り機を寄贈し、それらの機材を利用して糸紡ぎ・織り物・編み物の技術指導を現地の人たちに教えるトレーナーに対し、エリ蚕養蚕についての知識や技術を学ぶ講習会を開催しました。2004年度は、養蚕技術に関する人材育成への支援を継続し、村の人たちへのエリ蚕飼育や糸紡ぎを中心とする初歩的な技術指導支援を行います。

NPOや農家の方々とともに
どろんこになって田植えをしました

子どもたちの棚田は豊かな
稲穂をつけました

学校の環境教育支援プロジェクト

長野県
上水内郡三水村

子どもたちは教室でだけでなく
自然や農業を通して環境のことを学びました。

棚田と自然の関係

棚田は日本の原風景と言われるほど美しく、機能的に見ても「小さなダム」と言われるほどの保水力も持っています。この水田は、山間の集落の人々が自然と共生していくために作られたものでしたが、日本の経済成長とともに人々は都会に流れ過疎化していき、高齢化も進み、さらに日本の減反政策や効率的な農業経営への流れが拍車を掛ける形で、荒廃が進んでいる状況です。保水力に富む棚田は荒廃すると、土砂崩れなどの自然災害を招く危険性があります。
このように棚田と自然環境の関係は大きく変化しつつあります。

2003年度の活動と2004年度の計画

2003年度は、田園とりんご畑が広がる長野県上水内郡三水村の棚田で、川崎市立桜本小学校6年生が田植え、草刈り、稲刈りを行い、また夏の草刈りでは飯盒炊爨やキャンプで自然と触れ合いました。さらに、子どもたちは三水村での自然・農業体験と並行して、教室でも環境、農業などの勉強をしたほか、校庭にミニチュアの水田を作り、稲を栽培したりしました。9月には、学校のふれあい祭りで棚田での農業体験を発表したり、学校全体でお米を試食したりしたようです。
子どもたちはそれぞれの感性でいろいろなことを学んだようです。校庭で獲れたお米と三水村で獲れたものを食べ比べ、その違いに驚き、お米が自然のエネルギーを吸収しながら育つものだということを学び、また、一年を通じて棚田に向き合ったことで、棚田が抱える問題もかなり身近な問題として受け止めたようです。さらに、お米を育てた農家の方々の苦労も知り、またその巧みに尊敬の念を抱くなどいろいろな効果があったと自負しております。2004年度は関東圏の学校だけでなく、全国の学校数校の自然体験、農業体験を通じた環境教育を支援していく予定です。

希少な動植物が豊かな小笠原の海岸　　富士山での自然体験を前にした勉強会

環境学校支援プロジェクト

富士山

子どもたちのメッセージが ホームページから流れています。

「自分から環境に対して行動しメッセージを発信できる人“ 環境メッセンジャー ”を育てていきたい」。そんな思いから、野口健さん率いるNPOとともに、富士山と小笠原諸島で「環境学校」を開催しました。参加した子どもたちは日中に自然体験を、夕刻には野口さんが指南役となる「ふりかえり」の時間を持ち、考え（メッセージ）を発表し、意見を交換して、理解を深めていきました。子どもたちのメッセージはホームページでも流れています。

小笠原諸島

http://www.noguchi-ken.net/ACTIONS/2004/school/ogasawara

2003年度の活動と2004年度の計画

富士山自然学校　2003年7月26～30日　参加人数　24名

富士山の豊かな自然と、一方でゴミの不法投棄などで荒んでしまっている一面を体験しました。
自然のすばらしさと、人間によって破壊された自然の修復がいかに困難かを、富士山での体験を通して子どもたちは学んだようです。

富士山環境学校

小笠原自然学校　2004年3月26～31日　参加人数　31名

小笠原に住む生徒と全国から集まった生徒とが交わり、小笠原の希少な自然を体験し、社会や産業についても学びました。子どもたちは自然学校終了後も、それぞれの学校にもどりクラスメートに自分たちの体験を伝えたり、積極的に不法投棄された自転車を片付ける活動をおこすなど、「考えて」「発信して」「行動」しています。

2004年度は「環境学校」を3回に増やし、さらにたくさんの環境メッセンジャーを育てる予定です。

表紙写真：キリバス共和国クリスマス島 野生動物保護区に生息するヒメクロアジサシ

このコスモ・ザ・カード「エコ」活動報告書の用紙は古紙配合率100%の再生紙を使用しています。
印刷インクには大豆油インクを使用することで環境負荷の低減を図っています。
この報告書は、コスモ石油提供で作成し、エコカード基金に寄せられた会員の皆様の寄付金は使用しておりません。

制作

コスモ石油株式会社

〒105-8528　東京都港区芝浦一丁目1番1号東芝ビル
TEL　03-3798-3134
http://www.cosmo-oil.co.jp/

R100

PRINTED WITH SOY INK™